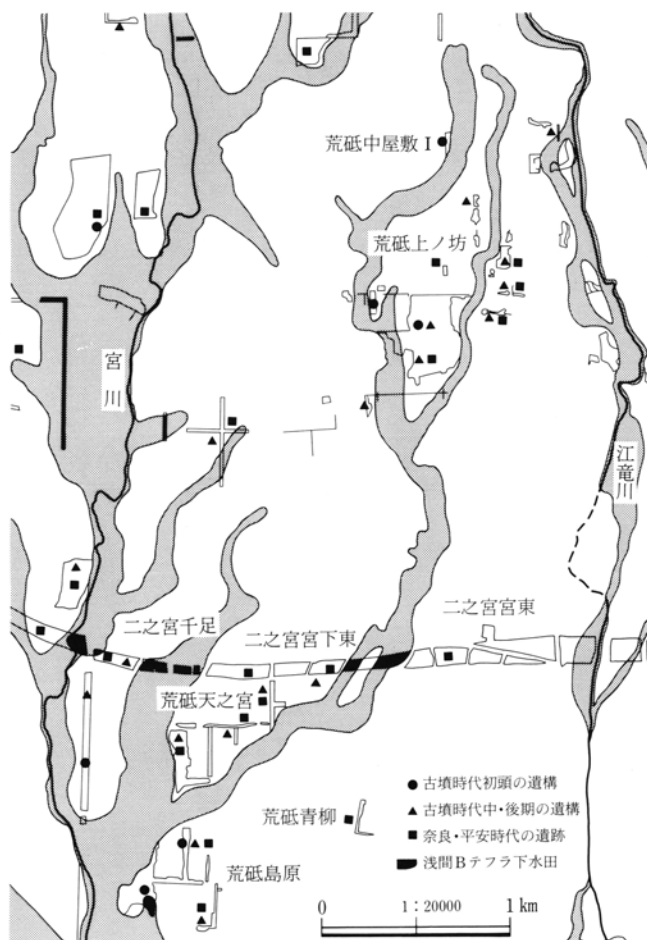


田拡大に伴った新開集落と考えられる。この低地の北部は上武国道建設工事に伴って発掘調査されており、二之宮千足遺跡東谷地にあたる。ここでは古墳時代前期以降7面の水田面が検出されている。これらの調査成果から、最も条件の良い地点が古墳時代前期に一部水田化され、古墳時代後期以降の開発の進展によって带状低地全体が次第に水田化されていくと推定される。荒砥天之宮遺跡では、古墳時代後期には荒砥上ノ坊遺跡西側からのびる低地沿いにも居住域が広がっており、こちらの低地の水田化にも成功していたのであろう。上武国道建設に伴って、带状低地のなかを調査した二之宮宮下東遺跡では古墳時代初頭の榛名二ツ岳渋川テフラの降下後、4面の洪水堆積物で埋没した水田と、1108（天仁1）年に降下した浅間Bテフラ直下の水田が検出されている。この遺跡の台地上の調査で検出された遺構は、古墳時代後期以降であり、古墳時代後期の開田に支えられた新開集落と考えられよう。荒砥上ノ坊遺跡では、古墳時代後期に東側の低地沿いに居住域が新開され、新たに水田耕地が拡大されているのであろう。荒砥上ノ坊遺跡のある水系では、古墳時代前期に点在していた集落が、遅くとも古墳時代後期には技術の導入を背景にして農耕地の拡大を図って新たに開かれている。

奈良・平安時代には荒砥上ノ坊遺跡をはじめ、前述の荒砥島原遺跡・荒砥天之宮遺跡では継続して居住域が検出されている。また、二之宮宮東遺跡・荒砥青柳遺跡のように奈良・平安時代に居住が始まる地点もある。荒砥上ノ坊遺跡の周囲の低地では埋没水田は調査で確認することはできなかったが、平成5年度の土壌調査と分析で浅間Bテフラ直下の黒色土から多量のイネのプラントオパールが検出されている。浅間Bテフラはほとんど水平堆積をしており、水田面に堆積している状態を示しているとの推定も可能であろう。他遺跡の浅間Bテフラ下水田の検出状況と奈良・平安時代の居住域の継続性や拡大傾向から考えると、荒砥上ノ坊遺跡の東西にある带状低地はほぼ全域が水田化され、満作に近い状況を



第153図 荒砥上ノ坊遺跡周辺の遺跡群

呈していたと考えたい。このことは荒砥上ノ坊遺跡の北西2kmのところにある荒砥諏訪西遺跡で、浅間Bテフラ下水田が微高地上に及んでいることから理解できよう。^(註16)

荒砥上ノ坊遺跡の居住域の変遷を、同水系の遺跡群の動向と関連づけて考えてみた。このような耕地拡大に伴う集落動向は以前に西側の宮川下流域遺跡群で確認されたことであり、荒砥上ノ坊遺跡水系でも同様のことが追認できたといえよう。^(註17)

4. 群馬県における集落出土の馬具

荒砥上ノ坊遺跡では、9世紀中頃の1区33号住居の床面付近から、轡の銜と引手金具および鉸具の破片が出土した。これらの出土状態は、床面に密着した状態ではなく、数cm上で出土している（第34図）。その地点は貯蔵穴にあたり、須恵器杯形土器（1250）

や土師器杯形土器(1248・1249)が同様の状態で出土していることから、馬具の出土状況にやや曖昧な点はあるものの伴出した土器とともに住居に残されたものと考えた。住居址出土の馬具は、大谷猛氏によって集成されたことがあるが、群馬県下では出土例が^(註18)少ないことから等閑視されてきた。しかし、馬具が集落から出土している例は少なからず見られる。

最近の群馬県の発掘調査の成果では、子持村白井遺跡群で6世紀初頭に馬が放牧状態で飼われていたことが判明している。また、平安時代の水田面には馬の蹄跡が残されている。また断片的ではあるが馬骨が^(註19)集落内に埋められている例もある。これらのことから^(註20)集落内に馬がいたことは想像に難くない。馬が^(註21)集落のなかでどのように使われていたかは、乗用・荷駄用・農耕用あるいは放牧飼育を問わず、集落内の社会構造を考える上で極めて重要な課題である。現段階では、集落内の馬の実態を示す考古学的な資料は多くないが、集落における畜力利用の実態解明の端緒として、ここでは群馬県における集落内の馬具の出土例を再確認することにしたい。

第3表は管見にふれた群馬県内の集落遺跡出土馬具一覧である。今回集成できた馬具は29遺跡から出土した63点である。内訳は轡の連結を一部でもとどめるものは9点、轡を構成する銜6点、引手金具8点、鏡板3点、鞍1点、鎧靭2点、雲珠1点、鎖1点、鉸具22点、鈴4点、および木製の鞍2点である。以下、これらの馬具の形態と出土状態および分布の特徴を分析する。

轡は、9点のうち5点が環状鏡板付轡で、大形矩形立聞のものと鉸具造立聞のものの両者がある。新田町西田遺跡では7世紀末から8世紀初頭と考えられる住居の埋没土から鉸具造立聞環状鏡板付轡が、高崎山下佐野遺跡では10世紀初頭前後の土坑から両者が出土している。これらは古墳時代後期に規格化されて盛んに古墳に副葬された型式のものである。8世紀以降の変遷は良くわかっていないが、奈良時代以降も引き続き使われていたのであろう。この他に鉸具造立聞の環状鏡板1点が前橋市二之宮谷地遺

跡18号住居から出土しているが、環の内側に装飾的な屈曲があり古墳時代の一般的な環状鏡板とやや異なる。群馬町堤上遺跡H-142号住居の埋没土中からは花形杏葉鏡板が出土している。住居の出土土器は7世紀末と思われるが、鏡板の編年型式は小野山節氏の分類に照らせば3期とみられる。太田市成塚住宅団地遺跡B H632号住居出土の轡は、上端に壺のついた棒状の立聞から杏葉形に似た鏡板を付けている。6世紀後半の住居から出土しているが、住居にともなう出土状態でなく、形式的にも「奈良時代以降の轡」と考えられている。前橋市鳥羽遺跡 I 103号住居出土の「眼鏡状の鉄製品」も奈良時代以降の鏡板の可能性が高い。同様のものが吉井町黒熊八幡遺跡29号住居から出土している。形態からは奈良正倉院蔵の「蒺藜轡」との形態的な関連も想定される。それぞれ8世紀・9世紀の住居埋没土から出土している。

銜はいずれも二連と思われる。荒砥島原遺跡では5世紀後半と考えられるE区9号住居床面から銜が出土している。報告書では兵庫鎖と引手金具と推定されているが、その後のソフテックス撮影による調査で銜と引手金具と判明した。他例はほとんど奈良時代以降の住居の床面および埋没土から出土している。吉岡町大久保A遺跡II区24号住居(11世紀後半)やII区102号住居(9世紀後半)出土例の報告に床面出土の記載がある。なお、株木B遺跡DH-53号住居出土例は青銅製で柄が短く、銜とすれば銜先環が傾いており特異な形態である。

引手金具は柄と壺部が一体の一本柄引手がほとんどである。一例だけ上栗須寺前遺跡群5A・03号住居(9世紀前半)の埋没土から柄と壺部一体の二条線引手が出土している。

鞍・鎧靭・雲珠・飾金具は、高崎山下佐野遺跡の3基の土坑から出土した例にとどまる。7区62号土坑には轡を欠くが、6区4B号住居貯蔵穴・7区61号土坑からは轡と鉸具・鞍が組合わさって出土し、62号土坑では雲珠・鎧靭・鉸具・飾金具が出土している。遺構に確実にともなう出土例であるが、他の出土遺物が不明である。報告書によれば、7区61号

第4章 調査の成果と課題

土坑は10世紀初頭の7区6号住居より古い。

鉸具は22点が出土しており、すべて鉄製である。

坂本美夫氏が平面形態で分類した蹄形・C字形・長

(註25)

方形・環状形の4種すべてがある。実測図からは基部・刺金の形態も数種あると看取できるが、これについては実見していないので今回は分類しなかった。

出土した鉸具の中で、時期が明確なものは先述した下佐野遺跡を除くと、箕郷町海行B遺跡S B 9出土

例(10世紀前半)と、前橋市芳賀東部工業団地遺跡H

—216号住居西壁中央周溝内出土例(9世紀初頭)の

2例である。前橋市鳥羽遺跡D289号溝出土例は、浅

間Bテフラ降下以後の溝埋没土から出土しており、

その溝は中世と考えられている。

鈴は、太田市成塚住宅団地遺跡で鉄製2点、吉岡

町大久保A遺跡で銅製2点、合計4点が確認できた。

いずれも遺構埋没土中の単独出土である。これらの

鈴は他の馬具と共伴していないので馬装として使用されたかどうかの疑問も残る。

(註26)

鞍はいずれも破損しているが、古墳時代後期の資料である。

第3表 群馬県における集落遺跡出土の馬具一覧表 (*は筆者推定の時期を示す。)

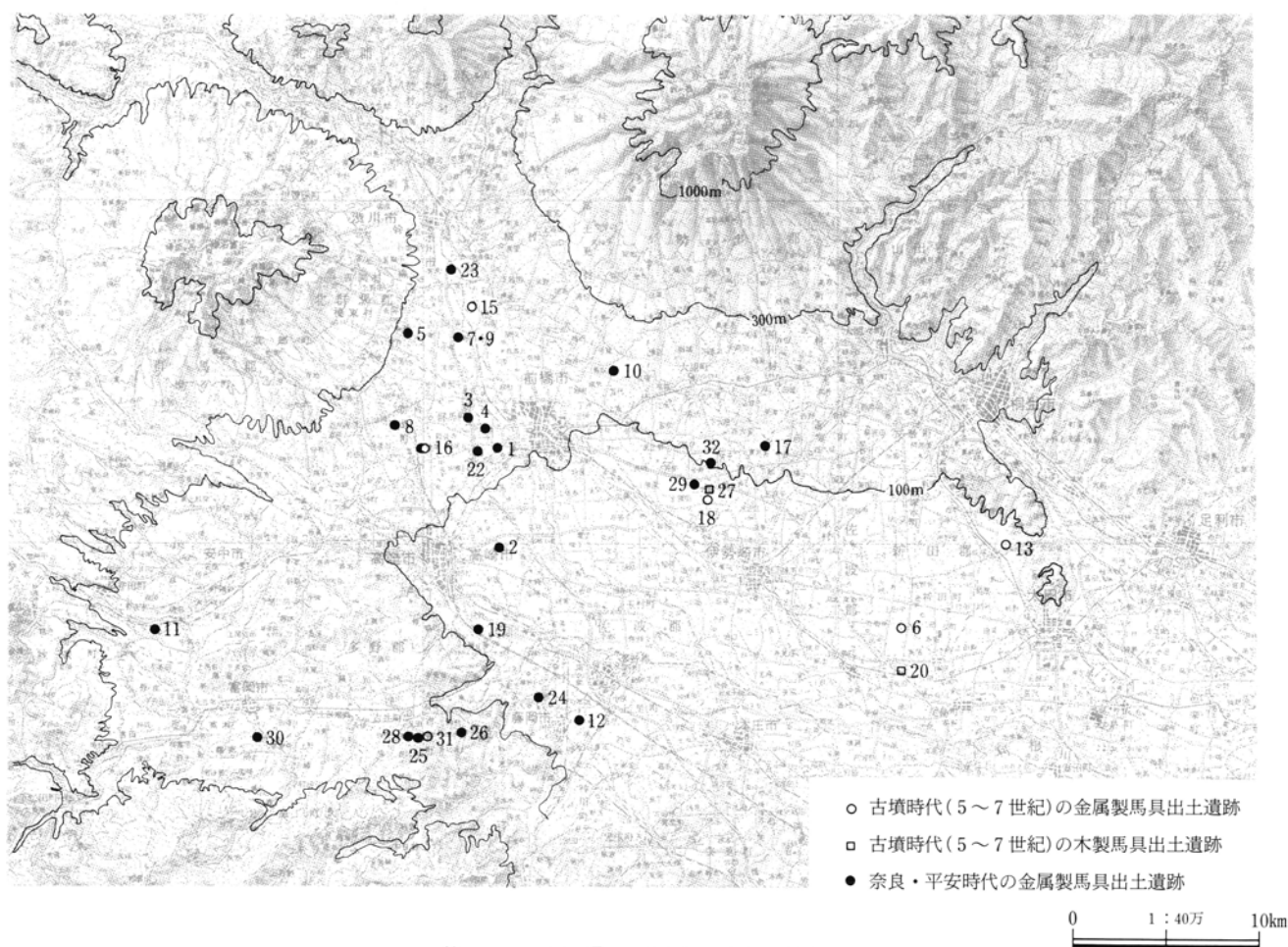
	馬具名	素材	所在地	出土遺跡・遺構	出土位置	出土遺構の時期	遺跡No
1	銜	鉄	碓氷郡松井田町	松井田工業団地遺跡B地点	表探		11
2	鉸具(環状形)	鉄	碓氷郡松井田町	松井田工業団地遺跡G II グリッド	表探		11
3	鉸具(長方形)	鉄	前橋市元総社町	草作遺跡	表探		4
4	鈴	銅	北群馬郡吉岡町	大久保A遺跡F11グリッド	表探		7
5	鈴	鉄	太田市成塚	成塚住宅団地遺跡EH-103	埋土	5世紀前半	13
6	轡	鉄	前橋市二之宮町	荒砥島原遺跡E区9号住居址	床面	5世紀後半*	18
7	一本柄引手金具	鉄	前橋市二之宮町	荒砥島原遺跡E区9号住居址	床面	5世紀後半*	18
8	鈴	鉄	太田市成塚	成塚住宅団地遺跡E区堀	埋土	5世紀前半～後半	13
9	鞍	スギ	新田郡新田町	下田遺跡1号溝	Hr-FA層(6世紀初頭)下	6世紀初頭以前	14
10	杏葉轡?	鉄	太田市成塚	成塚住宅団地遺跡BH-632	埋土	6世紀後半	13
11	杏葉轡?	鉄	太田市成塚	成塚住宅団地遺跡BH-632	埋土	6世紀後半	13
12	鞍	アカガシ亜属	前橋市二之宮町	二之宮宮下東遺跡	Hr-FA層(6世紀初頭)上	7世紀初頭以前	26
13	鉸具(不明)	鉄	多野郡吉井町	多比良追野遺跡H-72号住居	床面直上	7世紀後半	30
14	花形杏葉鏡板	鉄地金銅張	群馬郡群馬町	堤上遺跡H-142号住居	覆土	7世紀末	16
15	鉸具(長方形)	鉄	渋川市半田	半田中原・南原遺跡45号住居	埋土	7世紀末*	15
16	鉸具(長方形)	鉄	渋川市半田	半田中原・南原遺跡45号住居	埋土	7世紀末*	15
17	鉸具造立開環状鏡板付轡	鉄	新田郡新田町	西田遺跡2号住居	埋没土中位	7世紀末～8世紀初頭*	6
18	鉸具(馬蹄形)	鉄	富岡市下高瀬	下高瀬上之原遺跡13号住居	北西+12cm	8世紀中葉～後半	29
19	銜	青銅	藤岡市上戸塚	株木B遺跡DH-53号住居址	埋土	8世紀後半*	12
20	鞍轡?(眼鏡状)	鉄	前橋市鳥羽町他	鳥羽遺跡I区103号住居	中央部埋土	8世紀後半*	20
21	鉸具(馬蹄形)	鉄	渋川市八木原	有馬条里遺跡3.31号住居	埋土	8～9世紀*	22
22	鉸具(長方形)	鉄	前橋市小坂子町	芳賀東部団地遺跡H-216号住居	西壁中央周溝内	9世紀初頭*	10
23	鉸具(長方形)	鉄	前橋市小坂子町	芳賀東部団地遺跡H-216号住居	西壁中央周溝内	9世紀初頭*	10
24	二条線引手金具	鉄	藤岡市上栗須	上栗須寺前遺跡群5A・03号住居址	埋土	9世紀前半*	23
25	轡(眼鏡状の鏡板)	鉄	多野郡吉井町	黒熊八幡遺跡29号住居	埋土	9世紀前半*	25
26	鉸具(C字形)	鉄	前橋市荒子町	荒砥上ノ坊遺跡1区33号住居	貯蔵穴埋没土	9世紀中葉*	31
27	一本柄引手金具	鉄	前橋市荒子町	荒砥上ノ坊遺跡1区33号住居	貯蔵穴埋没土	9世紀中葉*	31
28	銜	鉄	前橋市荒子町	荒砥上ノ坊遺跡1区33号住居	貯蔵穴埋没土	9世紀中葉*	31
29	鉸具(長方形)	鉄	多野郡吉井町	矢田遺跡12号住居	床面+21cm	9世紀後半	24
30	一本柄引手金具	鉄	多野郡吉井町	多胡蛇黒遺跡62号住居	床面+10cm	9世紀後半*	27
31	銜	銅	北群馬郡吉岡町	大久保A遺跡II区102号住居	P1東床上	10世紀中葉??	7
32	鈴	銅	北群馬郡吉岡町	大久保A遺跡II区128号住居	床土10.5cm	9世紀後半	7
33	引手金具?	鉄	北群馬郡吉岡町	大久保A遺跡II区101号住居	埋土	10世紀初頭	7
34	鉸具造立開環状鏡板付轡	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区61号土坑	中央部底面	10世紀初頭以前	19
35	鉸具(環状形)	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡6区4B号住居	南西隅土坑内	10世紀初頭	19
36	鞍	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡6区4B号住居	南西隅土坑内	10世紀初頭	19
37	大形矩形立開環状鏡板付轡	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡6区4B号住居	南西隅土坑内	10世紀初頭	19
38	鉸具造立開環状鏡板付轡	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡6区4B号住居	南西隅土坑内	10世紀初頭	19
39	鉸具造立開環状鏡板付轡	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡6区4B号住居	南西隅土坑内	10世紀初頭	19
40	鉸具(C字形)	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
41	鉸具(C字形)	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
42	鉸具(環状形)	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
43	鉸具(環状形)	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
44	鍔紐	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
45	鍔紐	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
46	雲珠	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
47	飾金具	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
48	飾金具	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
49	飾金具	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
50	飾金具	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
51	鉸具造立開環状鏡板	鉄	前橋市二之宮町	二之宮谷地遺跡18号住居	西壁中央	10世紀前半	28
52	鉸具(環状形)	鉄	北群馬郡榑東村	御堀遺跡2号住居址	覆土	10世紀前半*	5
53	鉸具(C字形)	鉄	群馬郡箕郷町	海行A・B遺跡B区SB9	竈北側床面上	10世紀前半*	8
54	一本柄引手金具	鉄	前橋市大室町	荒砥上川久保遺跡5区13号住居址	埋土	10世紀前半*	17
55	鉸具(環状形)	鉄	北群馬郡吉岡町	大久保A遺跡1区17号住居	床土30cm	10世紀末	9
56	一本柄引手金具	鉄	群馬郡群馬町	堤上遺跡H-112号住居	北西隅	11世紀前半*	16
57	銜	鉄	北群馬郡吉岡町	大久保A遺跡1区105号住居	床土11cm	11世紀前半	9
58	銜	鉄	北群馬郡吉岡町	大久保A遺跡II区24号住居	床土	11世紀後半	7
59	鍔の連結	鉄	前橋市元総社町	天神遺跡4号住居	覆土	11世紀後半*	1
60	一本柄引手金具?	鉄	高崎市宿大畑町	天田・川押遺跡50号住居	埋土	11世紀後半*	2
61	鉸具(長方形)	鉄	前橋市元総社町他	史跡上野国分寺跡26次SK33	埋土	11世紀頃	3
62	鉸具(長方形)	鉄	前橋市元総社町他	史跡上野国分寺跡26次SK33	埋土	11世紀頃	3
63	鉸具(馬蹄形)	鉄	前橋市鳥羽町他	鳥羽遺跡D289号溝	埋土	As・B降下以後	21

以上のように群馬県下では、5世紀後半(鈴を含めれば5世紀前半)から中世におよぶ集落内の遺構から馬具が出土していることが判明した。このうち2割が古墳時代、8割が奈良・平安時代以降の遺構から出土している。奈良時代以降の馬具の編年は明確でなく、特に銜や引手金具のみでは時期を決定することは困難である。また、埋没土中からの出土例が多く、遺構の時期を馬具の時期と決定できる例は全体の半分ほどである。このように限定された状況ではあるが、古墳の副葬品として考えられがちであった馬具が古代の集落の中でも検出されることが再確認された。全体には大谷氏が指摘したように群馬県でも9～10世紀の遺構の馬具出土例が多い。しかし、群馬県では古墳時代の出土例もあり、そのうち荒砥島原遺跡例は5世紀後半にまでさかのぼることに注目しておきたい。また鑑に関連した馬具は少なく、

轡関連の馬具が多いことも群馬県の現段階の集成の特徴といえよう。

これらの馬具が出土した29遺跡の位置を示したのが第154図である。群馬県の地形は標高1,000m以上の山岳部、300m以上の山間部、100～300mの山麓部、100m以下の平野部に概ね分けられる。山麓部は利根川中流域の低地(水田卓越地域)の外縁にある榛名山や赤城山等の裾野にあたる。山体から流下する小河北川沿いに帯状の沖積地が形成されていて、弥生時代以降農耕集落が拡大していく地域である。平野部にも農耕集落は多く立地している。

古墳時代の馬具出土遺跡は7遺跡で、山麓部に5遺跡、平野部2遺跡が点在している。現段階では出土遺跡数が少ないので分布の背景を分析するには至らない。これに対して奈良・平安時代の馬具出土遺跡は21遺跡と増加し、山麓部から平野部縁辺に集中



第154図 群馬県の馬具出土遺跡の分布

している。平野中央部の馬具出土の遺跡は現状では少ない。この時代における分布の偏在は、平野部の発掘調査が少ないことに起因している可能性もあるが、山麓部の集落と馬の関連性が高いことを示唆する可能性もある。今後、平野部の遺跡の馬具の出土状況や、埼玉県北部・栃木県西部の状況も調査して、馬具出土遺跡と地形との関連を分析することが必要となろう。

また、馬具を官牧や東山道駅路等の政治的施設との関連で考えることもできるが、馬具出土遺跡の分

布からすればそれだけに限定できない分布傾向を示している。馬具出土集落の分析には古墳時代以来の農耕集落の発達過程のなかで考える視座を加えることも必要に思える。今回の分析では乗用馬具の集成が中心となったが、今後は農耕や荷役・飼育等を含めた地域内での馬の総合的な使役の実態を明らかにしていく方向性が必要であろう。群馬県における集落出土の馬具の背景については、今後の出土例の増加を待って、さらに深化したい。(小島敦子)

註

- 註1 中沢 悟1996「紡錘車の基礎研究(2)」『専修考古学』第6号
- 註2 小島敦子1995「2. 古墳時代初頭の出土土器について」『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 註3 坂口 一・三浦京子1986「奈良・平安時代の土器の編年―住居の重複と共存関係による土器型式組列の検討―」『群馬県史研究』24号
- 註4 この轆轤使用・酸化焰焼成の土器で、黒色処理を施した土器を『荒砥上ノ坊遺跡Ⅱ』では「クロロ土師器」と呼んだが、黒色処理する土器の総称として本書では「黒色土器」と呼ぶ。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1996『荒砥上ノ坊遺跡Ⅱ』
- 註5 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団専門員神谷佳明氏のご教示に拠る。
- 註6 全体の整理作業の進捗の中で前2巻の報告書に掲載した遺構一覧表を訂正した部分がある。
- 註7 前掲註2文献
- 註8 3区には住居が確認されていないが、これは発掘区が狭いため、周囲に住居が検出される可能性が高いと考えられる。
- 註9 松田 猛1983「荒砥中屋敷Ⅰ遺跡」『群馬文化』195号
- 註10 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1983『荒砥島原遺跡』
- 註11 小島敦子1986「初期農耕集落の立地条件とその背景」『群馬県史研究』24号
- 註12 1987『年報7』
- 註13 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1988『荒砥天之宮遺跡』
- 註14 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1992『二之宮千足遺跡』
- 註15 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1995『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』
- 註16 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1983『年報3』
- 註17 能登健・石坂茂・徳江秀夫・小島敦子1983「赤城山麓における遺跡群研究」『信濃』35巻4号
- 註18 大谷 猛1984「住居址出土の馬具」『学芸研究紀要』1東京都教育委員会
- 註19 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1993『白井大宮遺跡』
- 註20 安中市教育委員会1991『九十九川沿岸遺跡群Ⅰ』
- 註21 吉岡村教育委員会1986『大久保A遺跡Ⅱ区』
- 註22 小野山節1983「花形杏葉と光背」『MUSEUM』383号
- 註23 群馬県古墳時代研究会1996『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』
- 註24 前掲註10文献
- 註25 坂本美夫1988「鉸具考」『齊藤忠先生頌寿紀念論文集 考古学叢考中巻』
- 註26 関西の水田遺跡には地鎮めのために銅鈴を埋納する遺構がある。集落出土の銅鈴の用途については馬具だけに限定できない。
江浦 洋1996「古代の土地開発と地鎮め遺構」『帝京大学山梨文化財研究所報告』第7集

引用文献 (番号は、第3表遺跡Noと同じ)

- 1 天神遺跡 山武考古学研究所 1978 2 天田・川押遺跡 高崎市教育委員会 1983 3 史跡上野国分寺跡発掘調査概要 5 群馬県教育委員会 1984 4 草作遺跡 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985 5 御堀遺跡発掘調査報告書 榛東村教育委員会 1985 6 西田・谷津・中道・上新田・今井遺跡発掘調査報告書 東京電力株式会社 1988 7 大久保A遺跡Ⅱ区 吉岡村教育委員会 1986 8 海行A・B遺跡 群馬県箕郷町教育委員会 1988 9 大久保A遺跡Ⅰ区 吉岡村教育委員会 1986 10 芳賀東部団地遺跡Ⅱ―古墳～平安時代編 前橋市教育委員会 1988 11 松井田工業団地遺跡―遺物編― 松井田町教育委員会 1990 12 株木B遺跡 群馬県藤岡市教育委員会 1991 13 成塚住宅団地遺跡Ⅱ―1 太田市教育委員会 1993 14 下田遺跡 新田町教育委員会 1994 15 半田中原・南原遺跡 渋川市教育委員会 1994 16 堤上遺跡 群馬町教育委員会 1995
- 17 荒砥上川久保遺跡 1982 18 荒砥島原遺跡 1983 19 下佐野遺跡(平安時代・中・近世編) 1986 20 鳥羽遺跡G・H・Ⅰ区 1986
- 21 鳥羽遺跡A・B・C・D・E・F区 1992 22 有馬条里遺跡Ⅱ 1991 23 上栗須寺前遺跡群 1992 24 矢田遺跡Ⅲ 平安時代住居跡編(3) 1992 25 黒熊八幡遺跡 1996 26 二之宮宮下東遺跡 1994 27 多胡蛇黒遺跡 1993 28 二之宮谷地遺跡 1994 29 下高瀬上之原遺跡 1994 30 多比良良道部野遺跡 1997 31 荒砥上ノ坊遺跡Ⅲ 1997以上(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団